河盛好蔵著

エスプリとユーモア

岩波新書

F 85

河盛好蔵著

エスプリとユーモア

730

1902年堺市に生まれる
1926年京都大学文学部仏文科卒業
専攻—フランス文学
現在—共立女子大学文芸学部教授
著書—「人とつき合う法」「フランス文壇史」「文学空談」他
訳書—ブレヴォ「マノン・レスコー」
ジード「コンゴ紀行」
モロア「結婚・友情・幸福」
モロア「ジョルジュ・サンド伝」
「ヴァレリー全集」他

エスプリとユーモア　　岩波新書(青版) 730

1969年10月20日　第1刷発行©
1982年3月10日　第16刷発行

定価380円

著者　河盛好蔵

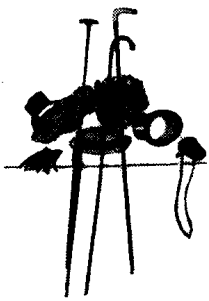
発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan

目次



ユーモアの定義……一
イギリス人のユーモア感覚……四一
黒いユーモア……七七
エスプリについて……九七
エスプリとユーモア……一二五
あるユモリストの話……一七三
あとがき……二〇九

ユーモアの定義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

現代フランスの大ユモリスト、ピエール・ダニノスは、『世界のユーモアのすべて』(一九五八)という世界ユーモア小説傑作選の序文に、「ユモリストというものは、もし絶えずユーモアを定義することを強要されなかったなら、ほぼ我慢のできる運命をもつことができるであろう」と書いているが、全くユーモアの定義ほどむつかしいものはない。各人各説なのである。いま、思い浮ぶものを順序なくあげてみると、

「ヒューモアとは人格の根底から生ずる可笑味であるという事になりはせぬかと思ふ。外の言葉で云ふと、ヒューモアのある人の行為は、他から見ると可笑しいが、当人自身では他から可笑しがられる訳がないと思つてゐる。彼は真面目である。無意識に可笑味を演じつゝある。もう一つ言い直すと、可笑味が当人の天性、持つて生れた木地から出る。従つて取つて付けた様に見えない。行雲流水の如く自然である。」(夏目漱石『文学評論』)

「人間はじつにはかなきものである。人生の価値は、現実の面においてこそ肯定されているけれども、はかなき人間の所為として考えれば、いずれもいずれも無に等しきものである。人間の価値を無と考えてみれば、人間の現実の活動のごとき、およそ児戯に類する滑稽である。

これはたしかに笑うべきものである。しかしまた、じつに憐れむべき人間の姿である。諸行無常。……この諸行無常の笑いをヒウマーという。それは価値の転換であり、現実からの転身であり、人間的な、人情的な処世観である。」(福原麟太郎『英文学の周辺』)

「ユーモアは、人生の馬鹿らしさ、おかしさに直面しながら、これを憎む事の出来ない場合に生ずる心状である。それは、人生の馬鹿らしさを馬鹿らしく感じない事でもなく、不合理を不合理と感じない事でもない。唯、それを、濫りに責めず憎まず、一種憐憫の情をさえ籠めて眺める心である。この時それはペイソスに近きものとなる。故に、それは、笑を刺戟しても哄笑とはならず、皮肉を言っても、辛辣骨を刺すが如きものとはならない。」(矢野峰人『英文学の特性』)

以上いずれも英文学者のユーモアに与えた定義であるが、こんどは現代フランスの喜劇作家として令名のあるマルセル・アシャールの『彼らと共に笑おう』(一九五七)のなかから引用してみよう。

「ジャック・スタンバーグはユーモアについて鋭い研究を発表した。彼はまずユーモアについて幾つかの定義を与えている。《ユーモアとは反抗の微笑である》、これはアンドレ・ミゲルのもの。《ユーモアとは最後のシガレットである》、これはイレーヌ・アモワールのやけくそな

定義。そして最後にどのほかのものよりも一層真実で、一層胸を打つクライス・マーカーの《ユーモアとは絶望の礼儀である》という定義をあげて、次のようにつけ加えている。《一方、ユーモアはエスプリ(機知)にくらべるとはるかにはっきりしないものである。もしくは肉眼では見えにくいものである。それはぱちぱちはねない。それは爆発しない。それに触れるとむしろ冷たくされる。それは微笑させることができるが、必ずしもそうとは限らない。それは実際のところ、否というための礼儀正しい冷たいやりかたにすぎない。何に対してもそうであり、承認しうる理由のあるなしは問題ではない。それは反抗していることは確かだが、問題の解決にはなんら寄与するところがない。それはただ事物の支柱を外して平衡を失わせるだけである。そのために、ユーモアはほとんど常に風変りなものに近づき、きわめてしばしば驚異すべきもののなかにまぎれこんでしまう。それは事物の表現であるよりも以上に、事物についてのヴィジョンである。ある人びとは至るところにユーモアを見るが、どこにもそれを見ない人たちもいるのである。》」

前述のダニノスは、「ユーモア……それは悲しみのカリカチュアだ」と定義し、またカナダの大ユモリスト、スティーヴン・リーコックの次の言葉を紹介している。曰く、「人生のばかげたことを親切な目で眺めること、並びにそれより生じる芸術的な表現というのが、ユーモア

について私の知っている最上の定義である。これを最上と考えるのは、それを見つけたのは私だからである。」

閑話休題。こんな定義を幾つあげても、ユーモアという言葉を巡って堂々巡りをするにすぎないであろう。それよりも歴史に溯って、この言葉の身元を洗うことのほうが大切である。これは私の力に余る大仕事であるが、幸いにフランスの比較文学研究の大宗フェルナン・バルダンスペルジェ教授に、「ユーモアの諸定義」(Les Définitions de l'Humour)という名論文があるので、それを種本にして、話を進めてゆきたい。もっともこの論文は博引旁証でわれわれになじみのうすい外国の文学者の名前がどっさり出てくるので、そこは適当に処理させて頂く。ユーモアについて書かれた本が読者の肩をこらせては申し訳がないからである。

＊　＊　＊

古代、中世の医学では、人間の体質と気質は、人体に含まれた四つの主要なフモール humor(体液)、すなわち血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の配合の具合によって決定される。もしこれらのフモールが正しい比率で配合されているばあいには、その人の気質は完全、つまり健康であるが、そのいずれかが優位を占めるばあいには、そしてこれが普通であるが、それによって多

血質、粘液質、胆汁質、憂鬱質の変化が生じると考えられていた。

この医学、生理学の術語を美学の領域に始めて転用したのはルネッサンス期のイタリアの文芸批評家たちであるらしく、彼らの一人は、劇中人物の性格は劇の筋を通じて首尾一貫していなくてはならぬ要請から、気質にもとづく一種の特異性に助力を求め、また他の一人は「フモール」に当るイタリア語のウモーレumoreを定義して、「このことよりも、むしろ他のあのことをする気になっている特殊な天性」と書いている。

エリザベス朝のイギリスは、誰もが自らの特異性を誇示するために、あらゆる気まぐれ、あらゆる気取りの横行を許した時代であるが、そのために特異性という意味に解釈されたフモールの英語化であるユーモアhumourという言葉が濫用に近いまで流行をきわめた。シェイクスピアや、とくにベン・ジョンソンがこのような愚劣な流行に対して眉をひそめたにちがいないことは、シェイクスピアが『ウィンザーの陽気な女房たち』のなかで、フォールスタッフの一味であるニムにユーモアという言葉を濫発させて、紳士のページに「またユーモアだ！　ああいう男がイギリス語を気ちがいの言葉にしてしまうんだ」といわせていることや、またジョンソンが『十人十色』(*Every Man in his Humour*)と『どなたも不機嫌』(*Every Man out of his Humour*)とを書いて、五十年前までは医学用語にすぎなかった言葉の甚だしい意味の拡張を証言してい

ることをもっても知られるであろう。彼は『どなたも不機嫌』の序文のなかでユーモアを定義して、「この言葉は、比喩によって、一般の性向にも適用することが許される。すなわち、ある人の、ある特殊な性質が、その人の感情、能力、精力の一切をして同一の方向をとらしめるほど強く支配するときには、それを、正しくユーモアと呼ぶことができる」と書いている。当時の英語の「ユーモア」をこんな風に解釈するならば、それは十七世紀のフランスの作家がしばしば用いた「ユムール」humeurときわめて近い語義になろう。コルネイユの『嘘つき』はその一例である。

性格や態度の独自性、すなわち社会生活によって一般に決定される思想や感情や表現の平等化に対する抵抗という意味に解されたユーモアという英語は、文学の世界のみならず、文学以外の世界でも使用されるようになった。そして十七世紀末には、会話において用いられるときにはウイット(エスプリ)よりも洗練されていないが、もっと意想外で、もっと自発的で、話者の気質そのものをより一層に示す諧謔の意味になり、文学で用いられるときには、滑稽的な思いつきよりも、もっと具体的で生気があって、より少く合理的で、普通の感覚よりも特殊な感覚を示すところの奇想を意味した。

フランス文壇における有名な「新旧論争」がイギリスにも反響を及ぼしたときにはすでにこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

の国では新時代の特権としてユーモアが主張されていた。スウィフトが居候していたウィリアム・テンプル卿は次のように書いている。「もし私のあやまりでないならば、われわれのイギリス文学は、おそらくわが国固有のユーモアと呼ばれる特性のおかげで、近代並びに古代の劇詩に立ち優っている。この言葉はまたわれわれの国語に固有のものであって、あらゆる他の国語では表現しがたい。」

ユーモアをイギリス人の性格の特性、イギリス滑稽文学の本質的な特色と見なすこの考えかたは、相当に早く大陸にも拡まった。これは美学や文芸批評におけるフランス趣味の進出に対してイギリス精神が抵抗し、合理的で「社交的」な古典主義の覇権から身を守ろうとした現われの一つと見ることができよう。

十八世紀になるとユモリストのなかで荒唐無稽に過ぎる者が出てきたので、アディソンは一七一一年四月十日の『スペクテイター』誌でこれをいましめた。「彼らは、ユーモアというものは常に理性によって抑制されなければならないこと、ユーモアは最も注意深い判断力によって導かれることを要求し、それはユーモアが最も大胆な自由をほしいままにしているだけになおさらそうであることを忘れている。この種の作品においても、他のあらゆる作品におけると同じく守るべき本来の義務がある。作者が自らの気まぐれな空想に完全に身を任しているよう

に見える時でも、彼が思慮分別を失っていないことを示すある種の思考の正しさがなくてはならぬ」と彼は書いた。アディソンは更にユーモアの系譜について述べ、偽のユーモアをいろいろあげて、裏側からユーモアを定義している（漱石『文学評論』第三編㈢参照）。「《真理》が家族の始祖であって、《良識》を生んだ。《良識》が《ウイット》（エスプリ）を生み、《ウイット》は《陽気さ》と呼ばれる遠縁の婦人と結婚して、《ユーモア》という息子を生んだ。したがって《ユーモア》はこの名家の最年少者であって、非常に性向の違う先祖たちの子孫であるから、性質が移り気で、変りやすい。時として荘重な様子やもったいぶった態度に出るかと思うと、また時として勝手気儘に振舞ったり、突飛な服装をしたりする。その結果、時には裁判官のように生真面目に見えるが、またほかの時には軽業師のようにおどけた真似をするのである。しかし彼は母親の血を非常に受けているので、どんな気持でいる時でも、仲間を笑わせることを決して忘れない」とアディソンは書いている。

十八世紀のイギリスはきわめて独創的なユーモア文学の開花した時代であることはよく知られているが、この時代の散文の大家たちに見られるものは、理性よりもむしろ気質に根ざす機知、美学理論のありふれた法則の無視、構成、判断、文章法の上で最上と見なされていたさまざまの慣習の打倒であった。そしてこれらの目ざましい新しさを示すユーモアという言葉は、

いち早く大陸にも波及したのであった。

こんな風にして、ユーモアがイギリス国民の共有財産であり、滑稽のイギリス的変種であることはよく知られていたが、その割に、ユーモアとウイットの区別は明瞭ではなく、両者は一組のものとして考えられる傾向があった。もっともホームのように、「ユーモア作家の特色は、厳粛と生真面目を装おいながら、楽しさと笑いを引き起すような色彩でものごとを描く作家にぞくする」と書いた人もいるが、批評家たち自身がユーモアとウイットをますます結びつけて用いるようになり、ついには、本来はユーモアにぞくすべき特性をしばしばウイットの領域に持ちこむに至ったのであった。

*　　*　　*

テンプルやアディソンの作品の初期のフランスの翻訳家たちは、英語のユーモアにユムール humeurもしくはエスプリ esprit の訳語を当てた。しかし当時のみならず、それからもなお久しくフランス語では、ユモリストというのは、ユムール(不機嫌)を抱いて、それを隠さない人、したがって無愛想で、ぶつぶつ不平をいう人間を意味し、内心の真面目さを快活の仮面で隠す人という意味は全くなかった。十八世紀の前半にはすでにスウィフトもフィールディングもフ

ランスには知られていたが、彼らの文学の特異性を示すユーモアという英語を用いることに人びとは非常にためらっていた。しかしこの言葉は密輸入の形ですでに英仏海峡を渡っていた。スイス人ベア＝ルイ・ド・ミュラは『英人および仏人についての手紙』(一七二五)のなかでユーモアを取りあげて次のように書いている。「これはフランス人のいう洒落、警句に近く、われわれがアインファール Einfall(思いつき)と呼ぶものにぴったりである。しかし、言葉の語義にこだわらないならば、イギリス人は、この言葉を、美徳を愚劣なものにしたり、悪徳を楽しいものにしたりして、一般に事物についての観念を覆すことを目的とする一種の想像力の豊かさの意味に理解しているように私には思える」云々。またル・ブラン神父は『一フランス人の手紙』(一七四五)のなかで、イギリス人はフランス語のユムールからユーモアという言葉を作ったが、その意味は全く違っていて、彼らにとっては、ユーモアとは、一人の人間があらゆる他の人間とは違っていることを見せるための度外れに滑稽な会話の意味である、と書いている。

そのほか『文学の五年間』という雑誌の編集者クレマンに寄せた一七五二年十二月三十日附のロンドンの無名氏からの手紙は、ユーモアの意味を明確にして欲しいという求めに応じて次のように答えている。「われわれがユーモアという言葉によって理解するのは、独特であると同時に自然な、天真爛漫でさえある諧謔である。それはよき趣味や礼儀作法に特に反するとい

うようなことは少しもない……この種の独特な諧謔は、理知よりも気質に、フランス語でユムールと呼ばれるものに、人間の本能的な性格に、その現在の情念もしくは空想に根ざしているように思われる」云々。筆者はそれにつづいてこの種の諧謔の実例をいろいろあげたあとで、ラ・フォンテーヌ、モリエール、ルニャール、ルサージュたちフランスの作家のなかにもユーモアの痕跡の見られることを指摘している。しかし、あくまでも痕跡であって、「諸君はフモールの迸り、火花、手を使って投げられるあの小さい火箭を持っている。しかしわれわれイギリス人は細い棒状の、蛇花火に似た、長い火箭を、火箭の束を持っているのである」と書き、「どうして諸君はこのユーモアという言葉をわれわれから取り上げないのか、それを必要としているのに」と親切に叫んでいる。

しかしユーモアという言葉はイギリス人の専売であろうか。ヴォルテールはそれに対して疑問を提出し、一七六二年四月二十一日にオリヴェ神父に宛てた手紙のなかで次のように書いている。「この諧謔、この真に滑稽なもの、この快活、この都雅、当人が自分で気づかずに口にする機知、イギリス人はこのようなものを表わす言葉を持っており、この観念を yumor と発音する humour という語で表している。このユムールを持っているのは彼らだけであり、他国民はこのような性格の精神を表わす語を全く持っていないと彼らは信じている。しかしそれはわ

れわれの国語に昔からある言葉で、コルネイユの幾つかの喜劇ではこの意味で使われている。」ヴォルテールは更に『哲学辞典』のなかでもイギリス人がこの言葉をフランス語から盗んだことに対して腹を立てている。だが十八世紀後半にはフランスにも相当に豊かなユーモアの水脈ができ上っていた。

＊　＊　＊

ドイツではどうか。ドイツにはフランス語のユムールに当るラウネ Laune(気分、気まぐれ)という言葉があり、時としてユーモアを指す場合にも使われていたが、フランスにおけると同じく、この英語のほうがドイツ語を圧倒し、ユーモアという言葉のなかには、ラウネでは表わしえない特殊のニュアンスが含まれていることを人びとは次第に気づくようになった。レッシングは一七六八年三月二十二日の『劇評』のなかで、それまでこの二つの言葉を同一視してきた誤りを告白して次のように書いている。「現在われわれはほとんどいつもユーモアの訳語にラウネを当てている。そんな風に訳したのは私が最初であったと思う。しかしこれは大きな誤りであって、人は私の例に倣わないように希望したい。なぜならこれらの言葉によって言い表わされた二つのことは全く違っていて、ある点では、相反してさえいることを反論の余地のな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor